

“あの日の空を誰が・・・”

「原爆詩 一八一人集 (1945～2007年)」より



写真提供：広島平和記念資料館

ゲスト：村上啓子さん

広島での被爆体験を基に、
今という時代を見ずえた平和への
メッセージを熱く語ります。



日時：2008年8月3日(日)

開演：午後2時(開場：午後1時30分)

会場：藤沢市労働会館ホール

(0466-26-7811)

JR藤沢駅北口より徒歩10分 または、

北口よりバスで「南仲通2丁目」下車すぐ

協力券：大人1000円・中高生500円

主催：朗読の会「海の音」

お問い合わせ：0466-24-5634(松本)

045-824-4085(樋山)

一度目は あやまちでも

二度目は 裏切りだ

死者たちへの

誓いを忘れまい

栗原貞子

出演：朗読の会「海の音」

歌：吉川春美

演出：渾大防一枝(劇団民藝)

音楽：中村美子(フルート・ケーナ)

照明：前田照夫(劇団民藝)

効果：鬼沢洋子(劇団民藝)



湘南

横浜総局
〒231-8504
横浜市中央区三本大通1-5
☎ 045-681-6101
fax 045-641-9696
mail kanagawa@asahi.com

湘南支局
〒251-0052
藤沢市藤沢89-1
☎ 0466-26-4911
fax 0466-26-4912

原木 ☎046-221-3300
三浦 ☎045-934-8010
川崎 ☎044-244-4306
横浜 ☎046-822-3211
鎌倉 ☎0467-22-3123
平塚 ☎0465-22-9755
相模原 ☎0463-35-3246
相模原 ☎042-752-3150

きょうの天気

6~12時 降水確率 12~18時

0	横 浜	0
0	三 浦	0
0	海 老 名	0
0	小 田 原	0

横浜	東	海老名	小田原
三浦	北東	南南東	波
湿度	60%	最高	最低
気温	32度	32度	25度
横浜	温	31度	23度
三浦	31度	33度	25度
海老名	33度	30度	24度
小田原	30度		

横浜	東	海老名	小田原
三浦	北東	南南東	波
湿度	60%	最高	最低
気温	32度	32度	25度
横浜	温	31度	23度
三浦	31度	33度	25度
海老名	33度	30度	24度
小田原	30度		

7月21日 (旧6月19日)

日出	4.42
日入	18.54
月出	20.35
月入	7.12

月齢18.0



原爆詩の朗読会に向け練習を重ねる「海の音」のメンバーたち。藤沢市内

92年から毎夏、戦争と平和をテーマに朗読会を開いている藤沢の市民団体「海の音」(松本利枝子代表)が8月3日、原爆詩や被爆者の証言などで構成する朗読会「あの日の空を誰が…」を開く。原爆だけを取り上げるのは初めて。「原爆症認定を巡る動きに接し、戦争は過去のものではないと改めて思った」とメンバーらは話す。(山本真真)

平和へ祈り込め朗読会

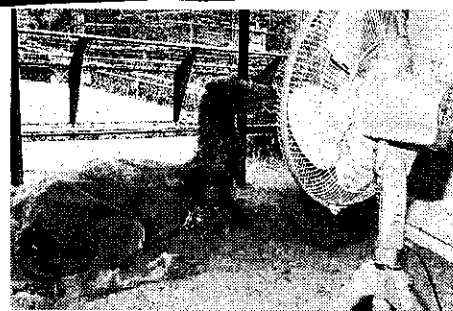
「原爆詩一八一人集」と 広島の被爆体験を聞く

藤沢の市民団体、来月3日開催

取り上げるのは、昨年出版された「原爆詩一八一人集」(コールサク社刊)。被爆詩人らの戦後間もない頃の作品から被爆体験のない現代詩人の作品まで集めた。英訳もされ、「ヒロシマ・ナガサキは風化しない」というメッセージを世界に発信する。

「今年になって原爆症の認定基準見直しや訴訟など被爆者の闘いが今なお続くことを痛感し、4月に話し合ってきた本を取り上げることにした」と松本さん(0466・24・5634)へ。

8月3日午後2時から、藤沢市労働会館で。一般千円、中高生500円。問い合わせは松本さん(0466・24・5634)へ。



梅雨明けで夏本番 ラクダも楽でない 横浜・野毛山動物園 関東甲信地方も梅雨明けし、夏本番となった19日。横



橘学苑一桐蔭学園 5回裏桐蔭学園

延長戦に入った10回表、川崎北は2点を勝ち越した。迎えたその裏、横浜商大の先頭打者は9番の武田航主将(3年)。2球目をフルスイングしたが、打球は二塁ゴロで1死。その後、内野安打と盗塁で好機を広げたが、最後の打者が三

横浜商大・武田航主将

え、整列した。新チーム発足時、金沢哲男監督から主将に指名された。部員数は約80人いたが、不安よりも「やってみよう」という気持ちで強かった。だが、現実はうまくいかない。ダラダラと練習したり、指示を聞かなかつたりする選手もいて、同じ目標に向かわせる作業は大変だった。

昨年10月、練習態度の悪さを監督らに指摘され、全選手が主

3回に武田君が犠牲バントで送った走者が、その後先制のホームを踏んだ。1点を追う8回も、武田君の犠牲バントで進塁した走者が生還。まとめ役としてチームプレーに徹し続けた。「負けたのは悔しい。でも最後まであきらめない、チームのいい部分が出た。そこだけは自信を持って言えます」。最後まで主将らしさは失わなかった。(安斎耕一)